

回遊性のある観光都市台東区をめざして —近代化遺産を活用した「かつば橋本通り商店街」活性化計画—

507094-1 吉岡 駿介
指導教員 伊藤 洋子 教授

1. はじめに

現在の東京は、2001年に掲げられた「東京の新しい都市づくりビジョン－都市再生への確かな道筋－」により、これまでの多心型都市構造という基本的な考え方から、東京圏全体を視野に入れた多機能集約型の「環状メガロポリス構造」の構築へと移行している。これにより「センターコア」と呼ばれる都心では、地域が持つ個性や文化、伝統、魅力を活かした街づくりが進められている。

2. 研究背景

観光都市として有名な上野や浅草を含む台東区もこの「センターコア」に含まれており「業務・商業街地の誘導」「都心居住と併せた複合開発の積極的誘導」「土地の有効・高度利用による住機能の強化」を進めることとされている。

現在、台東区の周辺では、丸の内、秋葉原、日暮里で次々と再開発が進められている。それに伴い台東区もつくばエクスプレスや日暮里舎人線、東北縦貫線といった新たな交通機関とそれに伴う周辺環境の整備や、国立西洋美術館の世界遺産登録に向けての動きを見せており、また、2006年には今後の都市計画の方針として、マスタープランが提示された。台東区は現在、大きな展開期を迎えようとしている。

3. 研究目的

本研究では、「台東区都市計画マスタープラン」を元に台東区の現状と問題点を調査・分析し、「観光」と「回遊性」というキーワードを抽出した。そこで、観光都市としての回遊性の向上を図るためにまちづくり計画を目的として設計を行う。

4. 観光都市台東区

台東区は起伏のある特徴的な地形と、緑や水辺という自然資源に恵まれた都市を基盤に、浅草寺や寛永寺といった寺社や、多くの祭り、伝統、文化、芸術、といった遺産を歴史とともに積み重ねてきた国際観光都市であると言える。そのため、マスタープランでは観光を軸にした計画が多く、「台東区観光ビジョン」を掲げ、国際観光都市を目指す上での方針を定めている。その中で、台東区は特に「回遊性」を高めることに力を注いでいる。



図1：環状メガロポリス構造

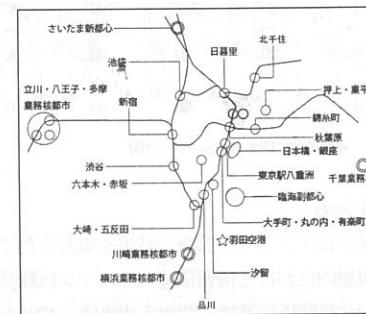


図2：センターコア

5. 回遊性の欠如

現在の台東区は上野と浅草の二つの地域に観光施設が偏っていることで中心部の都市の空洞化が目立っている。そのため、観光客は都市を回遊せず地下鉄で二つの地域を行き来し、結果的に地上部分の魅力の欠落や商店街の衰退を生み出している。今後、台東区は2013年の新東京タワーの開業に合わせて、墨田区との連携を強化し、上野～浅草～押上という東西軸の観光ラインの回遊性を高めていく必要がある。

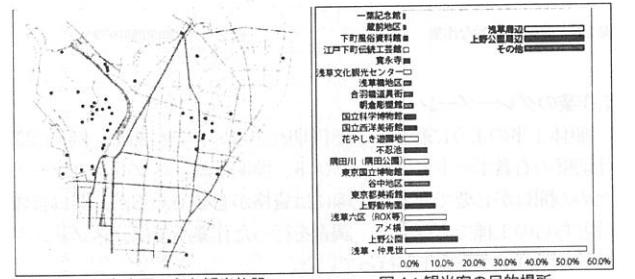


図3：台東区の主な観光施設

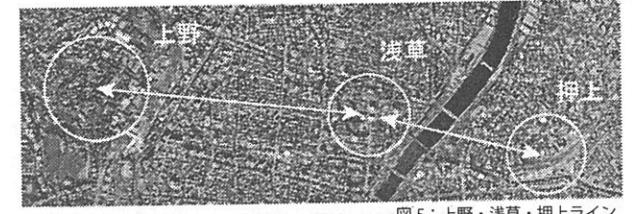


図4：観光客の目的場所

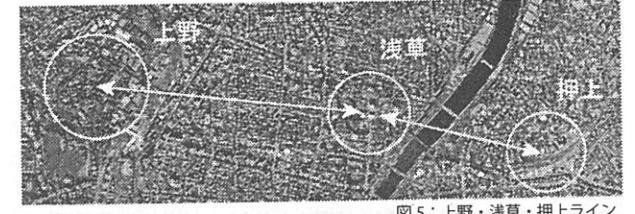


図5：上野・浅草・押上ライン

6. かつば橋本通り

上野～浅草間には「浅草通り」と「かつば橋本通り」の古くからの道が存在する。浅草通りは、寺町や門前町として栄えた台東区の主要な通りで、地下には銀座線が走っている。現在、景観整備や緑のブルバールといった具体的な計画が進んでいる。かつば橋本通りは、かつて上野の寛永寺、浅草の浅草寺の御成道として利用され、明治末までは鉄道馬車が走っていた通りである。しかし、銀座線の開業や都電の廃止、区画整備に伴う人々の流れの分散、大規模商業施設などの影響により、現在衰退の方向へ進んでいる商店街である。

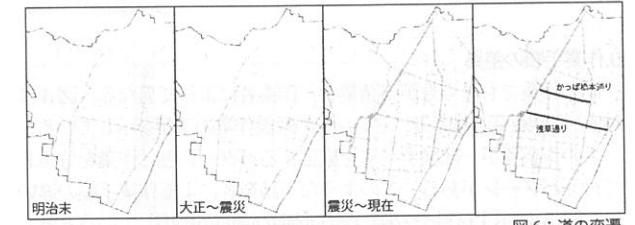


図6：道の変遷

7. ヒアリング調査

『かつば橋本通り公西会商店街振興組合』森本佳直理事長とのヒアリング調査において抽出された現状である。

商店街は昭和50年以降から衰退傾向になり、前述した要因に加え、高齢化に伴う後継者不足により空き店舗が増加している。衰退の影響は特に西側の上野方面が強く、線路と国道が分断要素となり上野公園からの観光客の流れを止めている。一方東側は浅草や道具街の好立地から、この商店街の中では栄えている方で、現在再開発計画が進んでいる。近年、通りにマンションの建設が増加しているが、ワンルームマンションが多く、定住志向の住民が増えているとは言えない。

8. 計画・設計

以上の内容を踏まえて、かつば橋本通りを新たな観光拠点として位置付け、観光客の流れを生み出し活性化を図ることで、台東区に一つの回遊性空間を作り出す。

計画の流れは新拠点事業のハード面と、商店街活性化事業のソフト面を合わせて段階的に進めていく。

【新拠点事業：ハード面】

◆(I期) 拠点A<敷地：旧下谷小学校>

震災復興小学校として建てられ、現在廃校となった旧下谷小学校を活用する。用途は、飲食専門のインキュベーション施設と区のアンテナショップとする。施設の入居条件として、施設卒業後に台東区内で活動することを条件とする。

◆(II期) 拠点B<敷地：銀座線検車区（技術区側）>

◆(III期) 拠点C<敷地：銀座線検車区（車両区側）>

検車区は、地下鉄銀座線の地上型車両基地であり、現在、工場業務は廃止となり検車区業務のみ使用され、主に地下の車両基地が利用されている。そこで、地下の車庫としての利用は継続とし、地上部を利益や地域に貢献する形で活用する。用途は技術区側を台東区メディアセンターとオフィス専用のインキュベーション施設、住居とする。車両区側は飲食・デザイン・オフィス専用のインキュベーション施設と住居とする。

◆(IV期) 拠点D<上野公園と新拠点との回遊性の向上>

上野公園からJR線の上空に架かる両大師橋の利用向上を図り、商店街への人の流れを生み出すために、橋に付設している長さ約150mのスロープと合わせて、商店街までの景観整備を行う。用途は事務所と店舗とレンタサイクル施設とする。

【商店街活性化事業：ソフト面】

◆(I期～II期) 商店街宣伝事業

芸大が行っている上野タウンアートミュージアムの街中展示スペースとして商店街の一部を開放する。

シャッター美化事業として、台東区の様々な景観をシャッターに描き、通りのギャラリー化を図る。その際、名称と説明と地図を添えることで、より観光客に台東区を知ついただくきっかけをつくる。

◆(III期) 商業活動事業

空き店舗活用事業としてインキュベーション施設から卒業した起業家に活用してもらう。また、地域に必要な施設として、エコストーションや、高齢者サロン、休憩所、駐輪場などの活用も試みる。

一店逸品事業として、各店舗の商品開発や、サービスを始める。商品はアンテナショップでの販売も視野に入る。

ポイントカード事業として、商店街の共通通貨を作成する。買い物や、エコストーションの利用に伴いポイントが加算され、点数に応じて金券、または商品と交換という形をとる。

◆(IV期) イベント事業

7月に行われる七夕祭りに加え、月に1回の定期市を開催する。また、新拠点の広場を活用し、連帶したイベント事業やフリーマーケットなどを行う。

◆(V期) 景観整備事業

電線の地中化や、歩道の整備を行う。

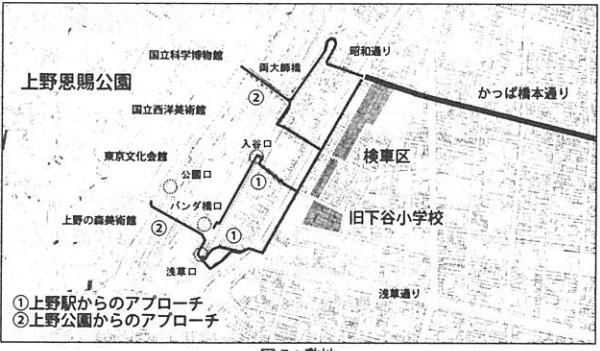


図7：敷地

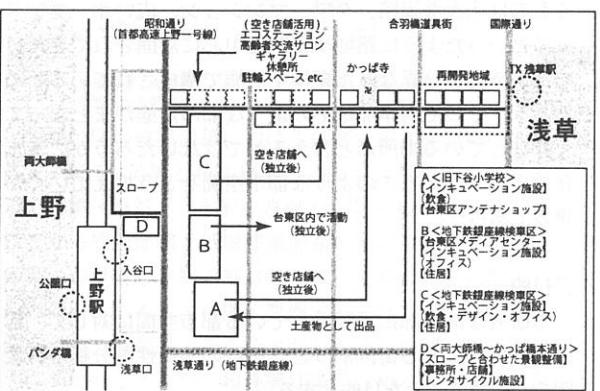
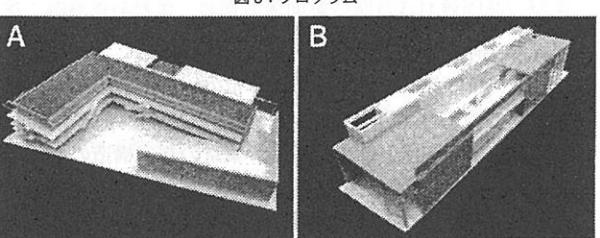
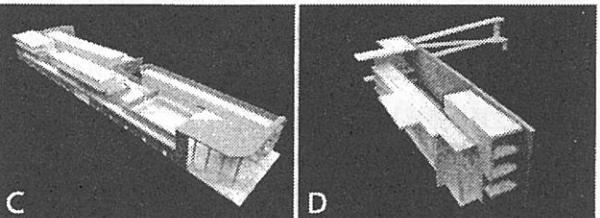


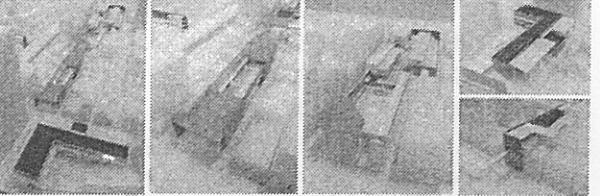
図8：プログラム



外部に動線を設けることで、内部空間を有効的に活用するとともに、かつて周辺地域に対して拒絶感を与えていた負の印象を解消させ、内と外をつなげることを目的としている。



上野公園から最短で商店街に導くために、両大師橋に付設するスロープの途中から、通りのボリュームと合わせて計画する。検車区の壁の外観を取り入れることで意識による誘導を図る。



参考文献・資料
「台東区史 通史編Ⅲ 上巻」台東区史編纂専門委員会 東京都台東区 2002
「台東区史 通史編Ⅲ 下巻」台東区史編纂専門委員会 東京都台東区 2002
『紹と真でたどる台東の文化と歴史 台東区発足60周年記念書』検討委員会 台東区 1999
『歴史を伝える近代のたてもの 台東区近代建築消費報告書・普及版』台東区教育委員会 1999
『台東区都市計画マスタープラン』2006 「浅草地域まちづくり組合ビジョン」2007 「台東区文化財地図」
『商店街の取り組み60事例』http://www.kanto.meti.go.jp/sesaku/yutusu/shougyou/60sen/2006071160sen.html

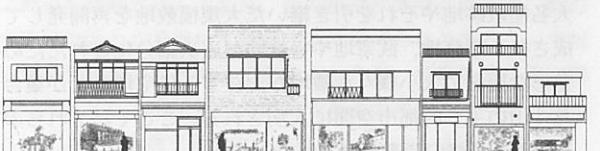


図9：シャッター美化事業